

先学期の終わりに書いたレポートと「私の日本語教育哲学」を読み返してみると、以下のことが記されていた。

- ・学習者が主体的な授業である
- ・教師の質の向上の「声」や「姿勢」が大事である
- ・間違いや発音のフィードバックをスムーズに行い学習者にいい授業と思ってもらうことが大事である
- ・会話文の演技では恥ずかしがらずにやるべきである
- ・自信を持って授業をすることが大切である。

YMCAの実習でも「学習者主体で発言できる場をつくること」の大切さと「声の質」の大切さを痛感した。

今学期のYMCAでの授業のDVDを観ると、「学習者の顔を見て話す」度合いが異なっていた。1回目の実習は、今までより緊張して思うような授業が行えなかった。2,3回目になるにつれて緊張もほぐれ学習者の顔を見たり、時間を確認したりするなど、自分に余裕が出てきた。一人一人顔を見ることが出来たので、学習者の顔を見て分かっているか分かっていないかを、3回目の授業で感じる事が出来た。他のメンバーの授業を後ろから見て、文字カードが見えにくそうにしている学習者がいたので、自分の授業で文字カードを上の方に挙げて全体に見えるようにした。

教案作成では、学習者が習う単語をどういった言葉で説明したらいいかが難しかった。例えば新しい言葉の説明だ。3回目の授業で「ある日」「うれしい」「嫌な」「すると」等の単語があり、絵カードや言葉で分かりやすく教えることが大変だった。特に「ある日」が難しかった。

教材準備では、だれでも見やすい字を書こうと意識した。教案に書いている部分の教材準備だけでなく、もしプリントの問題や本の問題で間違ったときの準備も必要だと3回目の授業で分かった。3回目の授業で私が作った読解問題を解く時間で、そのプリントに学習者は正解するだろうとあっていて、間違った時の準備を深く考えておらず、うまく対応ができなかった。わかりやすく間違いを訂正できるように、模造紙に文を書いて、どこの箇所が合っているかを学習者全員で確認すべきだと思った。

マイクロ・ティーチングでは、一回目の授業のリスニングの問題でCDの内容を音読することが必要だったので、2人での会話がしっかりと聞き取れるようにしたいと思ったが、スムーズにいかず苦しんだ。2,3回目の授業では、新語の確認の際に、文字カードのめくりがスムーズにでき嬉しかった。

北九州YMCAでの教壇実習で大変だったのは、どの授業も時間配分だ。一つ一つの授業にどのくらい時間がかかるかを書いた上でのイメージトレーニングが必要だと思った。また学習者を当てるときに間が空くと、授業の雰囲気が変わってしまう。前を向いている学習者やプリントや教科書を見ている学習者がいたので、誰を当てるかをすぐに決める判断力をつけ、臨機応変に対応したいと思った。悔しい点は、寝ている学習者がいたことだ。

起こしたこともあるが、ほぼ授業を聞いていなかったのので、ペアワークの活動の発表で当てた。私の声の大きさに問題があると感じた。

1回目の授業は学習者とたくさん会話できる授業内容であったが、問1の質問の答えを言った一人の学習者にいくつか聞いたりして答えてもらったが私の返しが「そうですね」「はいそうです」と単調だった。問1の2番の「日本についてどう思いますか?」の質問に対しても、もっと盛り上げて多くの学習者に聞いたらいいと思った。学習者を当てるときに名前を呼ぶ声のトーンが低くて、元気がないと感じた。学習者を当てるときはすぐ当てることが大切だ。当てるときの間があったことが、テンポよく授業が行えなかった原因の一つだと考える。また、模造紙の貼る順番や位置を考えていなかったのので、本番中学習者にとって見にくい黒板だと思いました。

2回目の授業は、模造紙の磁石が弱くて貼る時間を無駄にした。「燃えるゴミ」の意味の確認で「どんなものがありますか?」と聞いた時、学習者が「紙」と回答した。学習者全員にもいろんな例を出してもらうために、学習者一人が言ったことを「紙ですね」と復唱する、言葉のキャッチボールが必要だと思った。

最後の授業でも、時間配分に苦しんだ。時間内に終わらないと焦り、最初のあいさつから学習者の顔を見た後すぐに、教材のほうに目を向けていた。そして新語の確認で絵カードや文字カードを学習者に見せた時にも、すぐ次の単語に移っていたので、もっとゆっくり話して学習者のうなずきを確認すればよかったと思う。焦りから学習者の顔を見ることを忘れていた。読解の文を2回読む予定だったが、チャイムが鳴りそうで、これでいいのかなと思った授業だった。最終的にチャイムが鳴って、プリントの回収も休憩時間を使うことになってしまった。新単語の確認で文字カードはテンポよく行えたと思う。だがその単語の説明で「ある日」が分かっている学習者と分かっていない学習者が混在していて、どう説明したらいいか迷ってしまい時間がかかってしまった。もう一つ説明を用意しておく必要があったと思う。プリントの答え合わせの間3で間違いが多かったのだが、どこで間違っただのかの確認をする時間を使うべきだった。そこでプリントの本文を作ってフィードバックを行えば、学習者は前を向いて間違いを正しく直せると思った。読解問題で教師が文を読んで学習者があとから言うという授業では、最初のほうはスムーズに行っていたが途中で止まったり黒板のほうを見たりしていた。私がうまく言葉を出せずにいた時に、何人かの学習者が文を読んでくれたので、最後まで読むことができた。横溝先生が最初の授業の初めに「学習者を『仲間』と思うことだ」と言っていたことを思い出し、本当にそうだなと感じた瞬間だった。あのときに学習者が読んでくれなかったら、私は文を最後まで読み終えることはできたとしても、そのあとの指示を出すことは難しかったと思う。授業の手助けをしてくれた学習者に感謝したい。2、3回目の最後の授業のグループ活動では、出身国の有名な食べ物や冬休みになにをするかなどいろんな話をすることができた。一人一人に寄り添い、言いたいことを言えた学習者にとって、話ができる時間は貴重だと思った。

実習を通して、私にとって貴重な体験をすることができた。時間内に終わるか不安だったが、するべきところは終わったのでよかった。人前で話す経験を日本語教育実習でできて、回数をこなすことで緊張が緩和されることが分かった。息を整えてゆっくりと大きな声で話すことを心掛けることで、学習者にとっての私の教師の印象は、変わってくると思った。3回目の授業の最後の時間で、グループごとに学習者と話す活動で、2グループの一人の学習者に「私の授業どうだった？」と聞いてみたら、「もっとゆっくり話しても大丈夫だよ」「自信もって」「頑張るって」「声を大きく」とアドバイスをもらえた。

日本語を教える立場になったとしたら、学習者に言われたアドバイスを意識して授業を行いたい。時間に余裕がないと時計を見ることがあるので、時間に余裕を持てるように焦りを感じずに、授業を進めることができるようになりたい。模造紙を張る位置や剥がすタイミングを考えて、見やすい黒板にしたい。授業前日のリハーサルで、横溝先生が黒板の使い方を分かりやすく説明しているのを見ていて、授業のテンポ・学習者のやる気さが時間の使い方や教材の使い方が変わることがわかった。間違いを正しく訂正して、学習者にとっていい授業にしたい。授業の準備に時間を費やし、練習して授業に臨みたい。一人で練習した時ではスムーズに言えることが本番で出来ない事があったので、いろんな人に見てもらい、数をこなす、人前で話すことに躊躇せず、自信を持って授業を行いたい。